

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520119

研究課題名(和文) 13世紀イギリスにおける聖顔信仰の成立と展開：イメージと宗教的実践に関する研究

研究課題名(英文) Origin and development of the belief in the Holy Face in the thirteenth century England: research on image and religious practice

研究代表者

木俣 元一 (Kimata, Motokazu)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：00195348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：12世紀末から13世紀中期にかけての西欧における聖顔(ヴェロニカ)信仰の成立及び展開の諸相を『詩編』や『ヨハネ黙示録』等の写本をはじめとする美術作品やテキストに基づいて詳細に跡づけ、イギリスで発展した理由や意義を当時の歴史的背景である終末に関わる思想やアングロ＝サクソン以降の地域的伝統との関連で考察して、ヴェロニカのイメージと祈祷文が位置づけられる個人的祈念における宗教的実践の諸相を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We retraced the origins and development of the belief in the Holy Face in West from later twelfth century to mid thirteenth century on the basis of works of art and texts such as manuscripts of Psalters and Apocalypses and considered meaning and the reason why this belief in the Holy Face developed firstly in England, in relation to the movement of eschatological thoughts of that time and the regional tradition from the Anglo-Saxon time. We shed light on some aspects of the religious practice in private devotion in which the image and prayer text of Veronica was situated.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：聖顔 ヴェロニカ ヨハネ黙示録 詩編 ゴシック イギリス 三位一体 個人的祈念

1. 研究開始当初の背景

「聖顔」とは、三位一体の第二位格である口ゴスが受肉したキリストの顔が布に残した痕跡として奇跡的に成立したイメージを指し、西方キリスト教世界では「ヴェロニカ (Veronica)」がそれに当たる。これまで聖顔信仰は、新たに定立された「聖遺物 = イコン」として、サン・ピエトロに所在するヴェロニカのプロパガンダを通じ、12世紀末から教皇インノケンティウス3世の下で、教皇庁を中心に強力に推進されたと考えられてきた (H. Belting, *Bild und Kult: eine Geschichte des Bildes vor dem Zeitalter der Kunst*, München, 1991.)。しかし、最近の研究によれば、当時の教皇周辺には、こうした聖顔信仰の存在を確認する資料はまったく見いだされない (Ch. Egger, "Papst Innocenz III. und die Veronica. Geschichte, Theologie, Liturgie und Seelsorge," *The Holy Face and the Paradox of Representation*, Bologna, 1982, pp. 181-203)。これに対して、イギリスでは、1240年頃より『詩編集』や『ヨハネ黙示録』など一連の写本にヴェロニカのイメージが挿入され、インノケンティウス3世起草と伝えられる祈禱文が添えられ、贖宥と結びついて、個人的祈念という文脈で聖顔信仰が展開したと考えられる (P.K. Klein, "From the Heavenly to the Trivial: Vision and Visual Perception in Early and High Medieval Apocalypse Illustration," *ibidem*, pp. 247-278)。こうした研究の現状を踏まえ、本研究は、13世紀中期の段階では、イギリスにおける聖顔信仰はローマを含む他地域に先駆けて独自に形成され、発展したものと推定し、その様相を詳細に明らかにするとともに、西方キリスト教世界におけるイメージ礼拝の歴史という幅広い文脈に位置づけようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、12世紀末から13世紀中期にかけての西欧における聖顔 (ヴェロニカ) 信仰の諸様相を詳細に跡づけ、その成立および展開の状況や過程を当時のイギリスで流通していた図像やテキストを通じて緻密に再構成する。また、なぜイギリスで発展したのか、それがどのような意義を担っていたのか、当時の歴史的背景として終末論に関わる思想や、アングロ = サクソン以降の地域的伝統との関連で説明しようとする。さらに、これらのヴェロニカのイメージが位置づけられる個人的祈念における宗教的実践の諸様相を明らかにすることをめざす。とくに以下の5点の問題を軸としながら考察を進める。

(1) 「聖顔」図像と祈禱文の成立過程：13世紀イギリスの写本に挿入された最初期の聖顔イメージが、当時サン・ピエトロに存

在したヴェロニカのコピーではなく、「マイエスタス・ドミニ (栄光のキリスト)」など一般に幅広く流通していた神を表す図像から頭部のみを粹取って切り離すことで成立した過程に関して、とくにマシュー・パリ周辺での作例を通じて確認する。さらに聖顔に添えられた祈禱文を構成する詩篇章句やパウロ書簡の引用などの分析から、祈禱文テキストがいかなるコンテキストとの関連のもとに成立したかを明らかにする。これらの考察を通じ、13世紀中期のイギリスにおける聖顔信仰が、ローマでの実践を移植したのではなく、聖餐の秘跡を範とし地域的伝統を基盤とすることを確証する。

(2) 「三位一体」と「聖顔」の関係：聖顔信仰はキリスト教正統の信者であることの表明である信仰告白と深く関係するものとする。その核心をなす父と子と聖霊による「三位一体」という主題と聖顔信仰の関連性を明らかにするため、とりわけ詩編 109 編をはじめとするイニシアル装飾や挿絵に組み込まれた「三位一体」図像、さらにその一変種である「恩寵の座」図像を取り上げて考察する。とくに父の不可視性、父と子の派生関係、子の受肉、終末における神との「顔と顔を合わせて」の対面といったテーマが主要な論点となる。さらに、これらのテーマを媒介とした、アングロ = サクソン美術の「三位一体」と関わる図像伝統との関係も明らかにする。

(3) 『ヨハネ黙示録』と「聖顔」の関係：イギリスにおいて聖顔が一連の写本に挿入された時期には、ヨハネ黙示録写本が多数制作された。当時最後の審判が間近と考えられ、聖地の奪還に加え、ユダヤ教徒や異端を排除した完全なキリスト教信仰の早急な確立が求められた。それゆえ、これらの黙示録写本で本文や註解に施された挿絵と聖顔信仰とはコンテキストを共有する部分が多い。黙示録写本の彩飾やテキストの分析により両者の関係を明らかにする。とくに『グルベンキアン黙示録』(リスボン、グルベンキアン美術館所蔵)の小羊が巻物の第6の封印を解く場面に関する註解抜粋に対応する挿絵には、神の僕たちに刻印を施すという黙示録本文の主題との関連でヴェロニカが描かれ、その考察を通じ聖顔信仰を当時に固有の歴史的状况に位置づける。

(4) 『詩編集』と「聖顔」の関係：13世紀中期に聖顔が挿入された写本の多くが詩編集であり、祈禱文テキストに詩編章句が多数引用されるため、詩編集と聖顔信仰の関係を考察する。11世紀から12世紀末にかけて執筆された主要な詩編註解を精査し、当時の神学思想において、父の不可視性、父と子の相同性や派生関係、子の受肉、終末における神との「顔と顔を合わせて」の対面といった諸テーマが「神の顔」= 聖顔に関わることを明らかにする。

(5) 個人的祈念の展開と聖顔に関わる宗教

的实践：『詩編集』や『ヨハネ黙示録』写本をプライベートな状況で前にした世俗の「読者＝観者」という新しい受容者の登場、個人的祈念という文脈におけるこれらの写本の使用様態とイメージとテキストの関係、贖宥の問題、聖餐の秘跡の展開との関連性などの論点に基づいて、13世紀イギリスにおける聖顔信仰に関して考察を行う。

3. 研究の方法

教皇庁周辺における聖顔信仰：12世紀末から13世紀初頭にかけて、主として教皇インノケンティウス3世のもとでヴェロニカ信仰が推進されたという従来の学説を、その根拠に遡り再度詳細に検討する。

聖顔信仰の成立過程の再構成：1240年代に聖顔が挿入された詩編集や『大年代記』をはじめ、セント・オールバンス大修道院写本制作工房におけるマシュー・パリ周辺での状況(最近の研究として、Suzanne Lewis, *The Art of Matthew Paris in the Chronica Majora*, Berkeley, Los Angeles, 1987; D. K. Connolly, *The Maps of Matthew Paris: Medieval Journeys through Space, Time and Liturgy*, Woodbridge, 2009.)を中心に、11世紀から13世紀前半にかけてのイギリスの写本装飾・礼拝用テキストを対象として、ヴェロニカのコピーとされる図像が参照した源泉や、祈禱文の構成要素となったテキストが由来する固有のコンテクストを、とくに聖餐の秘跡や「三位一体」との関連で明らかにする。

「三位一体」図像の収集と考察：プリンストン大学 Index of Christian Art などのキリスト教図像データベース、フランス国立図書館写本室等での調査を通じ、12世紀末から13世紀末にかけてのイギリスおよびフランス北部で流通した「三位一体」図像を、とくに詩編109編のイニシアル装飾・挿絵に関して収集・整理し、基礎的資料の作成を進める (cf. F. Boespflug, Y. Zaluska, “Le dogme trinitaire et l’essor de son iconographie en Occident de l’époque carolingienne au IVe Concile du Latran (1215),” *Cahiers de civilisation médiévale*, 37 (1994), pp. 181-240).

『ヨハネ黙示録』写本における聖顔関係テーマの調査：13世紀中期にイギリスを中心として制作された『ヨハネ黙示録』写本において、聖顔と関連する図像およびテキストの収集を進める。

『グレルベンキアン黙示録』の挿絵の考察：神の僕の召命とユダヤ教徒の排斥をテーマとする挿絵に描かれたヴェロニカに関する考察(2010年公刊)をさらに発展させ、当時聖顔が担った信仰上の機能について考察を進める。

詩編註解の調査：J.-P. Migne, *Patrologia latina* の CD-Rom 版など、キリスト教教父学

関係のテキスト・データベースを用い、11世紀から12世紀末に至る詩編註解に多数みられる「神の顔」に関する註解の収集・整理を進め、父の不可視性、父と子の相同性や派生関係、子の受肉、終末における神との「顔と顔を合わせて」の対面といった諸テーマを通じた聖顔信仰との関連性について考察する。

個人的祈念の展開と聖顔に関わる宗教的实践：写本をプライベートな状況で前にした世俗の「読者＝観者」という新しい受容者の登場、個人的祈念という文脈における詩編集・黙示録写本の使用様態とイメージとテキストの関係から聖顔信仰について考察する (cf. N. Morgan, “Book for the Liturgy and Private Prayer,” *The Cambridge History of the Book in Britain*, vol. II: 1100-1400, pp. 291-316).

4. 研究成果

ヴェロニカ信仰が拡大したのは、その祈りの言葉を唱えるごとに10日間の贖宥が得られるという、教皇インノケンティウス3世自身によって起草されたヴェロニカ礼拝のための祈禱文の存在であった。こうしたヴェロニカ信仰の展開にもっとも早く反応したヴェロニカのコピーが、13世紀半ばから後半にかけてイギリスで制作された多数の写本に見いださせる。以下、こうした挿絵を列挙し、問題点を整理していくことにしよう。マシュー・パリは、1245年をわずかに過ぎた頃、『大年代記(Chronica Majora)』(ケンブリッジ、コーパス・クリスティ・カレッジ、MS 16, fol. 49v)において、1216年、サン・ピエトロ大聖堂からサン・スピリト施療院へ向かうヴェロニカの行列で起こった特別な事件に言及する。それはヴェロニカが「額が下になり、髭が上になるように」上下転倒していたというもので、これを凶兆(*triste presagium*)ととらえた教皇インノケンティウス3世は神と和解するため、「ヴェロニカと呼ばれる肖像を称えるために」祈りの言葉を起草したと伝える。続いてマシュー・パリはこの祈禱文全体を引用し、さらに80 x 85 mm という判型の上質のヴェラムを用いて正面観のキリスト胸像の淡彩素描(*tinted drawing*)を描き、上記写本の同じページに貼り付け、「多くの人々が、[.....]より多くの祈念を呼び起こすために、このような絵を描いた」と書き添える。ロンドン、英国図書館に所蔵される、1200年頃に制作されたオックスフォード仕様の詩編写本 (Arundel MS. 157, fol. 2) に後から挿入された挿絵(1240年頃制作)では、145 x 130 mm という大きさの枠中に、正面観によるキリストの胸像が同じくマシュー・パリによって描かれる。これは、同時代のイギリス写本におけるヴェロニカの現存するコピーの中でも、最も早い時期の作例として位置づけられるものである。挿絵の下方には、上記の『大

年代記』において引用されるテキストとほぼ同一の祈祷文が記される。この祈祷文ではヴェロニカは「布地(sudarium)」に残された痕跡として特徴づけられる。これに対し、13世紀初頭にローマを訪れ、ヴェロニカやサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノのサンクタ・サンクトールムにあるキリストのアイコン、マンディリオン、さらにルッカでは「ヴォルト・サント」を実見したティルベリのゲルウァシウスが残したテキストによれば、ヴェロニカは「板絵(in tabula pictura)」であったとされる。それゆえ、スーザン・ルイスは、この写本に挿入された挿絵は、このようにヴェロニカを板絵であったとする言語的記述に忠実に基づいているのであり、サン・ピエトロ大聖堂に存在したオリジナルをマシュー・パリスは一度も見たことがなかったのではないかと推定する。マシュー・パリスによるヴェロニカの「再現」がどのようなモデルに基づいていたかという議論は、すでにオッター・ペヒトも行っている。フローラ・ルイスは、これら2点のヴェロニカの描写を、マシュー・パリスによる別の挿絵(ケンブリッジ、コーパス・クリスティ・カレッジ、MS 26, fol. vii)に見られる同様の正面観によるキリスト頭部と比較し、これら3点の描写が成立するにあたって、必ずしもヴァティカンに存在するヴェロニカをモデルとする必要はなく、すでに幅広く流通していた「栄光のキリスト」の描写から、キリストの頭部だけを切り取ることで成り立ちうることを指摘している。とくに『大年代記』に挿入されたヴェロニカの描写については、左右上部にアルファとオメガが記入され、この説明がよくあてはまる。このほかにもイギリスで制作された詩編写本にヴェロニカを描く挿絵が見いだされる。『ウェストミンスター詩編』(ロンドン、英国図書館、MS Royal 2.A.XXII)では、1200年前後に制作された詩編写本に1250年頃ウェストミンスターで追加された5点の淡彩素描のうち1点がヴェロニカを描く。『イーヴシャム詩編』(ロンドン、英国図書館、MS Add. 44874, fol. 6v)冒頭の挿絵(1250-60年頃)、『ノリッジ詩編』(ロンドン、ランベス・パレス図書館、MS 368, fol. 95v)の詩編第109篇の前に置かれた全ページ大挿絵(1270-80年頃)も、そうした例を提供する。さらに、1270-90年頃に制作された『ヨークシャー詩編』(オックスフォード、ボドレイアン図書館、MS Laud. lat. 5)では、インノケンティウス3世による祈祷文の前にヴェロニカの描写を配するための空白部分が置かれる。また詩編写本のほかには、1260年頃制作された『ランベス黙示録』の巻末部分(ロンドン、ランベス・パレス図書館、MS 209, fol. 53v)でも、ヴェロニカが描かれる。また、他にはミサ典書にも例が見られる(パリ、アルスナル図書館、MS 135)。13世紀末の『ヨランダ・ド・ソワッソンの詩編=時禱書』(ニューヨーク、

ピアポント・モーガン図書館、MS M. 729)にも、ヴェロニカの描写がある。この写本では、インノケンティウス3世による祈祷文が見開きの左側ページ(fol. 14v)を占め、ヴェロニカのイメージが右側ページ(fol. 15r)に配される。両フォリオとも裏面ページ(fol. 14rとfol. 15v)は空白であり、この写本の他の折丁とは別個に付け加えられている。したがって、左右で見開きをなす祈りの言葉とその対象となるイメージは、この写本の他の部分から独立したユニットを形成するよう意図されている。またカレン・グールドによれば、カレンダーと『詩編』のあいだという、この見開きをなすフォリオの挿入される位置はたしかに妥当なもので写本の構成に混乱をもたらすものではないとしても、必ずしも当初からこの位置にあったと確言することはできない。

これらの写本に挿入されたヴェロニカは、当時はローマに存在した権威あるオリジナルのヴェロニカと関係すると考えられる。オリジナルのヴェロニカは、ローマまで巡礼し、遠い距離を移動することではじめて接しうる対象である。他方こうしたコピーは、詩編という個人的祈念で幅広く用いられた写本に挿入されることで、サン・ピエトロというラテン教会の中心をなすパブリックな空間で実践される聖顔の礼拝と、そこから遠く離れたイギリスという周縁的地域における個人的祈念とを媒介することになる。さらに、古代ローマ帝国における皇帝像を通じた皇帝崇拜のシステムや、貨幣を媒介とした統治者像の散種と同様に、聖顔は、一者たる神と各地に広がる多数の信徒を結ぶ媒体をキリスト教世界の隅々まで送り届ける機能も果たす。ヴァティカンという一点に集まった人々を、聖顔を核にして結ぶだけでなく、キリスト教世界のさまざまな場所に切り離されて個別に祈りを行う信徒たちを相互に結びつける媒介ともなる。こうした点では、ヴェロニカ信仰と並行して、当時ヴァティカンによって強力に推進された聖餐の秘跡が、「全実体変化」の理念を基盤として、神と信徒との交わりに加え、キリストの身体に喩えられる教会の一体性を確認・更新するメディアとしての役割を果たしたことも関連づけられなければならない。

これらの絵画的描写は、布地という素材に残された奇跡的痕跡であれ、板という基底材に画材で描かれたアイコンであれ、すでに存在する何らかの物質的イメージ自体の再現をめざしたものではないと考えている。これらの画像はむしろ、このような痕跡または再現を通じて成立した物質的イメージの母型ないしはモデルとなる、受肉した子=ロゴスとしてのキリスト、あるいは天上に存する本来は不可視の原型である神を描き出すものと理解すべきである。ということは、これらの画像は、かつてサン・ピエトロ大聖堂に存在したヴェロニカという一つの聖遺物=画像

を再現するのではなく、各々が1点の写本というコンテクストに取り込まれているとはいえ、それ自体が、いわばヴァティカンのヴェロニカと同様に、一個の独立したディヴォーションナル・イメージ(祈念用画像)として機能することが期待されたのである。それゆえにこそ、『大年代記』と同じく、英国図書館所蔵の詩編写本(Arundel MS.157)に挿入された画像など、インノケンティウス3世起草の祈祷文が添えられたのである。実のところルイス自身も、この詩編写本(Arundel MS.157)に挿入された画像が当初は独立したプライベートな祈念用画像であったと推測し、そのためおそらくイタロ=ビザンティン様式によるアイコンなどのモデルに依拠し、ビザンティン的な絵画スタイルや金を多用する技法が用いられたと考える。フローラ・ルイスは、13世紀イギリス写本に見られるヴェロニカ・イメージが詩編をはじめとする祈念用写本に登場することから、これらが祈念のために使用されたと述べる。さらにペーター・クラインも、『グルベンキアン黙示録』の挿絵に登場するヴェロニカの表現と、上記の写本に挿入されたヴェロニカの描写とを比較し、後者がナラティブな挿絵において教化に関わる機能を果たしていたのに対して、前者が純粹に祈念に関わる機能を担っていたと結論する。『グルベンキアン黙示録』のヴェロニカは、挿絵内部にある皇帝クラウディウスの手にその視線を向けるが、これに対し、その他のヴェロニカでは、その視線は明らかに挿絵に対して真正面から向かう観者の視線と交わり、ヴェロニカと対面する観者の間に直接的なコミュニケーションを成り立たせる。

イギリスにおけるこうした動向において重要な意味を持つと推定できる人物として、セント・オールバンス修道院の修士であり、年代記作者、画家でもあったマシュー・パリスを挙げることができる。彼は、1200年頃か、そのすぐ後に誕生したと推定され、1217年1月21日にセント・オールバンス大修道院の修士となり、1259年歿している。マシュー・パリスは、『大年代記(Chronica Majora)』(ケンブリッジ、コーパス・クリスティ・カレッジ、MS. 26)の執筆を、最後の審判が1250年に起こるという前提で、1240年か、そのすぐ後に開始した。この著作では、天地創造からほぼ最近の出来事までを、ひとつづきの歴史として扱っている。実際には1250年に最後の審判は起こらず、1260年にこそ最後の審判が訪れるという想定に変わって、1258年中頃まで執筆を続したが、その後は体調を崩して助手にその仕事を受け渡した。彼は1245年をわずかに過ぎた頃、『大年代記』で、1216年、サン・ピエトロからサン・スピリト施療院へ向かう行列で、ヴェロニカが上下転倒した事件に言及し、インノケンティウス3世がこれを凶兆ととらえ、神と和解するため祈祷文を起草したとし、それを唱えることで10

日間の贖宥が得られることに触れつつ、その全文を引用する。しかし、上述したエッガーの調査によれば、きわめて奇妙なことであるが、教皇庁関連の資料には、この事件にも、そしてマシュー・パリスが引用する祈祷文や贖宥にもまったく言及がない。このことからヴァティカンとは別個に、イギリス独自でヴェロニカを個人的な祈念や贖宥に関わらせる動きがあったと考えるべきであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

木俣元一「『ホルトゥス・デリキアールム』における「神殿の垂れ幕」再考 イメージの可視性/不可視性を読む」、『西洋美術研究』3(2011), pp. 33-50..

Motokazu KIMATA, “Facies ad Faciem”: Holy Face, Imprints, Visions,” *Images and Visions in Christian and Buddhist Culture, Bulletin of Death and Life Studies*, 8 (2012), pp. 117-131.

木俣元一「キリスト教図像の規範と自由をめぐる一考察: 13世紀における『詩編』109編のイニシアル装飾と「詩編の三位一体」」、『西洋美術研究』16(2012)、pp. 65-84.

Motokazu KIMATA, “Une lecture de l’ amour dans La Dame à licorne,” *La dame à licorne et l’ art européenne autour de 1500 dans les collections du musée du Cluny*, Paris, Tokyo, 2013, pp. 167-169.

〔学会発表〕(計2件)

木俣元一「中世の写本挿絵における幻視表現と読者/観者のまなざし」、国際シンポジウム「見えないものの形」、日仏会館、2011年11月27日。

木俣元一「《貴婦人と一角獣》における恋愛のテーマを読む」、精神病理コロック(招待講演)、2014年2月8日、名古屋大学医学研究科。

〔図書〕(計1件)

木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』名古屋大学出版会、2013年、468ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木俣元一（名古屋大学・大学院文学研究
科・教授）

研究者番号：00195348

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：